



一般社団法人

日本肩関節学会

Japan Shoulder Society

Newsletter

09

2018.01

▶ 理事長あいさつ

一般社団法人 日本肩関節学会理事長 柴田陽三



新年明けましておめでとうございます。本年も何とぞよろしく御願ひ申しあげます。会員の皆様にとりまして一層の飛躍の年になることを祈念申しあげます。

さて、一昨年の10月に日本肩関節学会の理事長を拝命してはや1年3ヵ月が経過しました。この期間の本学会の重要な出来事についてご報告申しあげます。

昨年度、本学会を長年ご指導頂いていた名誉会員の安達長夫先生（2016年10月22日ご逝去）、櫻井實先生（2017年5月1日ご逝去）がご逝去なさいました。この場をお借りしまして本学会に多大な貢献を果たされましたお二人に心より御礼を申しあげますとともに哀悼の意を表したいと存じます。昨年度、会員総数は1,827名で65名増加し、会費の未納者は51名減少しました。

年会費は学会の事業を遂行するための大事な財源です。会員の皆様からお預かりした会費を肩関節外科学の発展のために大事に使わせて頂きますので、引き続き会費の納入をどうぞ宜しく御願ひ申しあげます。2014年から全会員がJournal of Shoulder and Elbow Surgeryの電子ジャーナル版を閲覧出来る様になりました。ただ、2016年雑誌社からの購読料請求時期と本学会の決算時期の違いから一般会計から購読料の支払いが困難になり、高岸直人賞基金から一時的に借り入れし支払いを致しました。この借入金は今5年間で一般会計から高岸直人賞基金の方へ返却を予定しております。昨年は、できるだけ各種委員会をウェブ上で行うことで支出を抑え、返金額を入れても収支は黒字で財務が健全に推移しておりますことをご報告申しあげます。

学会の最も大きな事業は学術集会の開催です。第44回日本肩関節学会学術集会が菅谷啓之会長のもとで開催されました（2017年10月6～8日）。第45回学術集会は菅本一臣会長のもと2018年10月19日（金）～20日（土）に大阪国際会議場で開催予定です。もう一つの重要な事業として雑誌「肩関節」の発刊があります。長年、編集委員会委員長として雑誌の発刊にご尽力を頂いた濱田一壽先生が名誉会員に就任され、委員長を退任される事になりました。先生のご功績に心より感謝の意を表したいと存じます。また、今後は佐野博高編集委員会委員長のもと雑誌の発刊がなされることをご報告申しあげます。

さて日本肩関節学会では、欧州肩肘学会（SECEC）、韓国肩肘学会（KSES）との交換留学生制度、アメリカ肩肘学会（ASES）とは日本肩関節学会からのみ派遣する留学制度を行っております。今後は会員の皆様がスケジュールを調整して応募をしやすくなるよう、応募の時期を前倒しにする予定です。

本邦の肩関節外科手術件数の調査を4年ごとに行っています。本邦でどれくらいの肩関節手術が行われているのか、新しい手術であるリバーズ型人工関節を含めて、各術式施行数の推移を知ることが出来ます。肩関節外科医を志す医師は、多く手術が行われる術式を身につけることは必須でしょう。2009年に第1回の、2013年に第2回の調査が行われ、第3回目として2017年の調査が行われます。会員の皆様におかれましてはアンケートの御協力をよろしく御願ひ申しあげます。

最後になりましたが、学会に対する御要望がありましたら事務局宛にお知らせ頂けますよう御願ひ申しあげます。

▶ 新代議員就任あいさつ

代議員 乾 浩明

この度、新しく日本肩関節学会代議員をさせていただきます乾浩明です。

私は、1992年大阪大学整形外入局し、1999年より信原克哉先生に師事し肩関節について学んだ後、信原病院および大学の関連病院で数多く肩疾患の治療にあたってきました。その間2001年には“白蓋の形態からみた動揺肩の病態”という演題で肩関節学会において発表し学会賞をいただきました。その後大阪大学の吉川秀樹、菅本一臣両教授のもと肩のバイオメカニクスについて研究を続け2003年に学位を取得しております。2012年より信原病院・バイオメカニクス研究所所長として引き続き肩周辺の基礎研究、臨床研究を継続してまいりました。運動器を扱う整形外科の中でも肩関節自体の動きは複雑であるがゆえに研修医時代より大変興味をもっておりました。臨床の場で目の前の困っておられる患者さんに対応していくことはもちろんですが、多様な関節の動きや、そのような動きをする関節の形態について考察していくことが現在も自分のなかでは最も重要なテーマの一つであります。たまたま信原先生のもとで肩関節の勉強を開始し、今も続けられていることはとても幸運だったと思っております。今から肩を学ぶ先生方に私自身が感じたような興味を少しでも持っていただけるような学会にし、自分自身も肩関節外科学の進歩普及により貢献するべく微力ながら今後も努力させていただきます。宜しくお願い申し上げます。

代議員 田中 栄

今回代議員に選出していただいた東京大学の田中栄です。現在取り組んでいる専門分野としては、骨代謝、骨粗鬆症、関節リウマチが中心ですが、実は日本肩関節学会への exposure はそれらよりも早く、初めて日本肩関節学会に参加させていただいたのは1988年に東北大学の桜井実先生が主催された学会でした。1987年に大学を卒業して、当時は三井記念病院に勤務しておりました。まだ整形外科医としてはかけだして、右も左もわからない段階でしたが、部長であった故加幡一彦先生の「なんでもいから学会に参加して見聞を広めてきなさい」というお計らいで、仙台の学会に参加させていただきました。あらかじめ信原克哉先生の「肩(第2版)」を購入して予習していったのですが、正直内容については理解できないところも多かったような記憶があります。ただ大変活発にディスカッションが行われており、「魅力的な学会だな」という印象をうけました。

その後、1999年に米国でクリニカルフェローとして勤務していたときに、人工肩関節や腱板修復(open procedureでしたが)の手術に触れる機会があり、肩関節外科への興味がさらに深まりました。帰国後、玉井和哉先生のお勧めもあり、東京大学で肩関節外科の診療をするようになりました。自分自身肩関節外科の経験、知識とも不足していることは痛感しておりますが、東京大学でも肩関節外科に興味を持ってくれる若手が増えてきており、今後若手に教えてもらいながら、皆で日本肩関節学会を盛り立てていきたいと思っております。またこれまで行ってきた基礎研究が、肩関節外科の分野にも応用できるのではないかと考えております。個人的には関節包の機能にとっても興味を持っております。

今後ともご指導ご鞭撻、何卒よろしく願い申し上げます。

代議員 夏 恒治

この度、代議員に選出いただきました市立三次中央病院の夏恒治と申します。

野球少年であった私はスポーツ医学やスポーツ障害に興味があったため、平成8年に広島大学を卒業後、同年に広島大学整形外科学教室に入局させていただきました。その後の研修期間中にバレーボールのスポーツ障害の疫学調査を行ったことや特発性上腕骨頭壊死症の症例を経験したことから徐々に肩関節外科に興味を持ち、さらには当時は限られた施設でしか行われていなかった肩関節鏡視下手術を勉強する機会を得て肩関節外科医を志す決意をしました。それ以降、故安達長夫先生をはじめ、奥平信義先生、望月由先生のご指導のもと研究と診療を行わせていただいております。

現在は市立三次中央病院において肩関節外科、鏡視下手術、人工肩関節置換術、スポーツ障害、四肢骨関節外傷などの診療を担当しております。大学院で学んだ探求心を忘れず、最新かつ最高の肩関節外科の医療を提供できるように努めております。特に骨折を中心とする外傷に関しては病院を挙げて力を注いでおり、外傷診療の指導ができる県下有数の病院としての地位を築いてきました。

昨年は多くの皆様にご参加いただきました第43回日本肩関節学会学術集会において、望月由会長のもとで事務局長という大役を仰せつかり、普段は参加者としてしか参加していなかった学会には代議員の先生方をはじめ多くの方々にご尽力いただき支えられていることを再認識させていただきました。これまでも広報委員および査読委員として日本肩関節学会の運営に携わらせていただいておりますが、これからは代議員として、歴史ある日本肩関節学会が引き続き発展していくために、微力ながら寄与させていただきたいと思っておりますので、ご指導、ご鞭撻のほど、よろしく願いいたします。

代議員 西中直也

この度、歴史と伝統があり、国際的にも評価が高い日本肩関節学会に微力ながら貢献したいと切に思い代議員に立候補し就任することとなりました。どうぞよろしくお願い致します。私は、昭和大学を卒業後、昭和大学藤が丘病院整形外科に入局し故山本龍二教授、筒井廣明教授、鈴木一秀代議員に師事し肩関節外科を学び、現在に至っています。本学会には2000年に入会しました。これまで主に、投球障害肩、関節鏡手術、そして肩のバイオメカニクスについて発表、投稿してきました。

他の関節も同様ですが、特に肩関節診療にとって欠かせないのは機能診断とそれに対する対応です。したがって、問題点のあった機能不全を改善するための機能訓練が重要であり、理学療法士と連携が大事であります。本学会では肩の機能研究会が常に同時に開催されており素晴らしいことだと思います。しかし、この肩の機能は重要であるにも関わらず、未知な部分が非常に多いのも特徴であり、今後解決すべきことは数え切れないと思います。そのためには肩のバイオメカニクス分野を始め基礎研究による解析が必要であり、代議員として今後積極的にサポート出来る様に努めたいと思います。

また、一昨年から昭和大学に新設されたスポーツ運動科学研究所の外科系代表者を兼任しています。この研究所は医学部のみならず歯学、薬学、保健医療学部、基礎研究室、さらには他施設と共同研究出来る事が特徴であります。このような環境を日本の肩の研究・治療に生かしていく所存です。

日本肩関節学会は国内の他の学会と比較しても雑誌のレベル、国際色の強さは勝っていると感じています。今後は世界と比較しても遜色のない学会となっていくと思います。このような本学会での活動を通じて、日本の肩関節外科の発展に貢献したく強く思います。何卒、よろしくお願い致します。



代議員 藤井康成

この度、新たに日本肩関節学会の代議員に選出して頂きました藤井康成と申します。私は1986年に鹿児島大学整形外科に入局し、当時の酒匂教授の指導のもと、当初は大学院にて脊椎の靭帯骨化の基礎研究をやらせて頂きました。その後臨床分野として関節およびリウマチ班に所属させて頂き、股関節、膝関節の骨切りや人工関節、さらには内反足など足の外科まで幅広く経験を積むことができました。肩関節との出会いは、鹿児島市と反対側の大隅半島の関連病院に赴任した際、当時私の前任者として鹿屋体育大学に勤務されておられました国立スポーツ科学センターの奥脇透先生にご指導を仰ぐ機会を得、スポーツ医学、特に外傷や投球による肩障害の患者さんの治療をサポートしたことがきっかけでした。その後は酒匂教授に当時千葉大学の守屋秀繁教授をご紹介頂き、1998年から約1年千葉大学に国内留学し、森石丈二先生、当時川鉄千葉病院の菅谷啓之先生、さらには当時大阪厚生年金病院の米田稔先生のご指導を賜り、肩関節を勉強させて頂きました。鹿児島に帰ってからも、関東、関西、九州など多くの先生方に症例の相談を持ちかけては試行錯誤を繰り返し、経験を重ねて参りました。人のネットワークの大切さを痛感し、その広がりや深さを少しずつ積み上げてきたからこそ、今回、代議員に選出して頂けたのだと感じております。今後は代議員として、日本肩関節学会という大きく、太いネットワークを通して、より多くの会員の皆様が少しでも多くの討論や交流の機会を増やすことができますよう微力ながら尽力して参りたいと存じます。今後とも変わらぬご指導を賜りますよう宜しくお願い申し上げます。

代議員 松村 昇

この度、日本肩関節学会の代議員に選出していただきました松村昇と申します。私は2002年に慶應義塾大学を卒業した後、学生時代に肩を怪我したことがきっかけとなり、同大学の整形外科科学教室に入局しました。肩を専門にやっていきたいという初心から、臨床班の中で上肢班を希望し、主に当時大学に所属していた小川清久先生および池上博泰先生から肩関節医学をご指導いただきました。その後は関連病院をまわり、2011年に欧州へ短期滞在了した後、大学に帰室しています。欧州留学は半年間という短い期間でしたが、様々な先生と接するうちに物事に対する考え方や、肩疾患に対する見方が根本から変わりました。自分の中で大きな分岐点となり、以後日々の臨床および研究に励んでおります。

日本肩関節学会には卒業後3年目の2005年に入会し、第32回以降の学術集会を毎年楽しみながら勉強させて頂いており、学会や研究会を通じて、直接または間接的に多くを学んでいますが、肩の諸先輩方はいつでもの先生に質問しても真摯にご指導いただけるのが印象的で、肩関節外科を志して本当に良かったと実感しています。大学間や病院間での垣根を感じさせない点もとても魅力的に感じています。

まだまだ学ぶべきことが多い若輩者ですが、大好きな肩に関する仕事にもっと深く携わっていきたくと考え、伝統ある日本肩関節学会の代議員になることを希望いたしました。現在は日常診療で患者様から学びながら、画像解析やバイオメカニクス、腱板構成筋の変性予防と再生を目指した基礎研究などを行い、肩関節疾患の治療成績向上に少しでも貢献していきたいと考えています。もとより微力ですが、肩関節医学の進歩普及に貢献できるよう精一杯邁進していく所存です。何卒宜しくお願い申し上げます。

▶ 第44回日本肩関節学会を終えて

第44回日本肩関節学会学術集会 会長 菅谷啓之 (船橋整形外科病院 スポーツ医学・関節センター長)

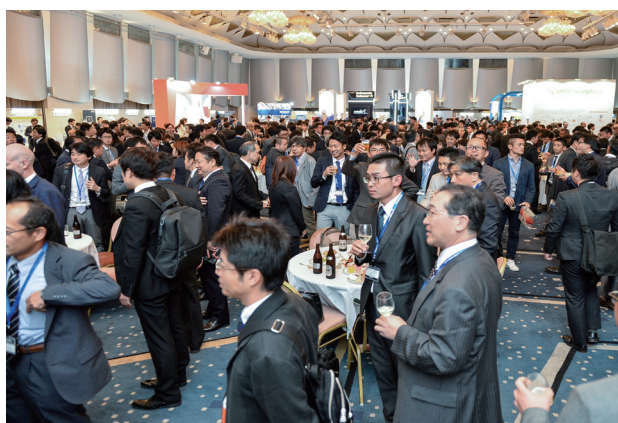


去る2017年10月6日～8日までの3日間、東京・品川にて第44回日本肩関節学会を開催させて頂き、無事成功裏に終えることができました。これもひとえに皆様の温かいご支援とご協力のお蔭でございます。ここに厚く御礼申し上げます。周知のとおり、本学会は例年と大きくフォーマットを変えて開催させて頂きました。まず、40名もの海外からの招待講師を招聘し、気鋭の日本人医師を交えて、すべてシンポジウム形式のThe 1st Asia-Pacific Shoulder & Elbow Symposiumを併催しました。また、第14回肩の運動機能研究会より

看護部門を独立させ、第1回肩の看護研究会も併催としました。さらに、例年になく広大なスペースの会場と展示スペースを用意し、海外からの参加者も多く、総計で2,200名の参加者を得ることができました。また、1,000名収容可能なThe 1st Asia-Pacific Shoulder & Elbow Symposiumの第一会場では、素晴らしいワールドクラスのプログラムと共に、英語の苦手な方でも積極的に聴講および発言できるように同時通訳を用意しました。さらに、日本肩関節学会で、史上初めてアプリを導入し、多くの先生方から便利であったと前向きな評価を頂きました。実際、アプリのダウンロード数も、参加者実数を超える2,331名に達し、アプリ制作会社からも参加者数を超えるダウンロード数は珍しいとのことで、本学会の注目度の高さを物語るものでした。

一方で、大幅なフォーマットの変更のために、抄録集の事後配布をはじめとする混乱を招いてしまったことも事実であります。ここに皆様に深くお詫び申し上げます。先ごろ、理事長・副理事長と前学術集会長・次期学術集会長からなる学術集会検討委員会が日本肩関節学会に新たに設置されました。今後は、学会側と学術集会側の両者が緊密に連絡を取りながら学会企画運営を行ってゆくことで、今回のような混乱を避けることができると思います。

学術集会の国際化は喫緊の課題でありペーパーレス化は時代の流れでもありますし、今回の学術集会は素





晴らしかつたと多くの方々にお褒めの言葉を頂いたことも事実であります。今回のやや無謀ともいえる試みが、今後の日本肩関節学会と学会員の更なる飛躍と発展のために、多少なりとも役立ったとすれば私の無上の喜びとする所です。皆様、ご協力とご支援、本当にありがとうございました。

▶ 第45回日本肩関節学会会長あいさつ

第45回日本肩関節学会学術集会 会長 菅本一臣 (大阪大学大学院運動器バイオマテリアル寄付講座)

このたび第45回日本肩関節学会を2018年10月19日(金)～20日(土)の両日に大阪国際会議場にて大阪大学が主催させていただくことになりました。

今回学会のテーマは「肩関節を議論する Discuss the shoulder」といたしました。近年日本肩関節学会でもグローバル化が叫ばれています。それを私なりに解釈した結果として、このテーマを考えました。

私が考えるグローバル化とは学会での英語の発表や討論も必要ですが、最も重要なことは日本独自のオリジナリティのある研究成果を如何に世に問うことができるかであると考えています。名古屋大学の名誉教授益川敏英先生は海外での英語の発表なくともノーベル賞を受賞されました。それはひとえに研究の素晴らしさが評価されてのことであると思います。

日本肩関節学会では遠藤寿男先生の loose shoulder や信原克哉先生の rotator interval lesion など独自性のある研究を様々に輩出してきたという輝かしい歴史があります。そのたいまつを後に続く先生方に渡していくためにも、本学会を成果あるものになりたいと思います。日本肩関節学会においてはこれまで素晴らしい研究が行われてきましたが十分に吟味されていないために、発表の段階ではもう一つ物足りないものも数多くあるように感じていました。今回の学会のテーマが「肩関節を議論する Discuss the shoulder」とあるように、許される限りの時間をかけて肩関節を十分に議論して、それを楽しみながら、素晴らしい研究となるように後押しができればと考えています。

またこれまでも様々なテーマが主題やシンポジウムの中で取り上げられてきました。その成果は日本からの素晴らしい研究として国内外でも知られるところとなっています。しかし、主題やシンポジウムのテーマは例年その年の4～5月頃に学会のホームページなどで初めて掲載され、そのために十分な準備期間を設けることができません。特にプロスペクティブな研究や時間をかけた比較検討などの研究が行いにくい状況にあったのではないかと考えました。

今回は「宿題報告」という試みを提案したいと思います。3テーマに関して、1年間の準備期間をもって十分な検討を行って、その成果を来年の本学会にて報告していただきたいと思います。広く全会員から公募を募りたいと思いますので、よろしくご応募ください。

なお主題はすでに学会のホームページなどでテーマを決定いたしましたので、ご参照いただき、それにも多くの会員からの応募をいただきたいと思ひます。

▶ 第46回・47回日本肩関節学会学術集会のお知らせ

第46回日本肩関節学会

開催日：2019年10月25日(金)～26日(土) (予定)

開催場所：ホテル国際21(長野県長野市県町576)

THE SAIHOKUKAN HOTEL(長野県長野市県町528-1)

第47回日本肩関節学会

開催日：2020年10月9日(金)～10日(土) (予定)

開催場所：北海道札幌市(予定)

▶ 委員会報告

雑誌「肩関節」編集委員会

委員長 佐野博高

会員の皆様におかれましては、いつも雑誌「肩関節」への投稿・査読などで多大なご協力を頂き、厚く御礼申し上げます。

雑誌「肩関節」編集委員会は委員27名と、日本肩関節学会の中でも最も大きな委員会です。本年度は、2009年から8年間にわたって本委員会を引っ張ってこられた濱田一壽先生が勇退され、佐野博高が委員長を引き継ぐことになりました。副委員長については内山善康先生に加えて、新たに鈴木一秀先生にご就任いただき、中川照彦担当理事のご指導の下で、雑誌「肩関節」の編集に伴う様々な業務に当たって参ります。諸先輩方が築き上げてこられた雑誌「肩関節」の伝統を守りつつ、さらなる質の向上を目指して微力を尽くして参ります。引き続き、ご支援・ご協力のほどよろしくお願い申し上げます。

雑誌「肩関節」第42巻への投稿は2017年11月22日に締め切れ、合計119編の論文をご投稿いただきました。例年通り編集委員と、代議員、査読委員が1論文につき3名で査読を行い、それらの結果を基に各編集委員が採否の判定を行います。Rejectと判定された論文、major revisionと判定された論文のうち担当委員が審議必要と認めるもの、3人の査読者の査読結果が著しく異なる論文(三者三様の場合)、経過観察期間が1年未満など投稿規定に沿わない論文、原著論文希望として投稿された論文、その他、担当委員が判断に迷う論文、何らかの理由で編集委員全員の意見を聞きたいと考える論文については、2018年2月から3月にかけて予定している編集会議において、委員全員で検討する予定です。

最後に、本誌への投稿の際には、学会ホームページ上で最新の投稿規定や必要書類をご確認くださいようお願いいたします(<http://www.j-shoulder-s.jp/entryrule/index.html>)。もしご質問・ご意見等がありましたら、事務局にメールでご連絡をお願いいたします。



国際委員会

委員長 菅谷啓之

国際委員会は、2016年秋以降、菅本一臣先生を担当理事とし、委員長菅谷啓之、委員として今井晋二先生、佐野博高先生、船越忠直先生、三幡輝久先生、望月智之先生の7名をメンバーとして活動してまいりましたが、2017年11月より佐野博高先生が編集委員長に就任されたため退任され、後任として乾浩明先生が新メンバーとして就任されております。2018年は、既に募集を開始しているASESおよびSECECトラベリングフェローの選考があり、5月の日本整形外科学会時に最終選考を行い、ASESは2名、SECECは1名（韓国からも1名）を決定し、秋のそれぞれの学会開催に合わせて派遣いたします。また、3月には2019年3月に韓国へ派遣するKSESトラベリングフェローの募集を開始いたします。皆様奮ってご応募頂きますようよろしくお願い申し上げます。また、10月の第6回国際委員会にて、SECECとKSESのトラベリングフェロー受け入れの際の各地区の受け入れ担当責任者の若返りを図るということで意見が一致し、北海道地区：大泉尚美先生、東北地区：山本宣幸先生、関東地区：高瀬勝己先生、中部地区：後藤英之先生、関西地区：三幡輝久先生、中四国地区：菊川和彦先生、九州地区：伊崎輝昌先生が候補に挙がり、後に全員の皆様に承諾を頂きました。2018年5月には韓国からのKSESトラベリングフェロー2名の受け入れ先を選定していきますので、その節はどうぞよろしくお願い申し上げます。また、国際委員会では、個人的な長期海外留学の門戸を常に開いて斡旋のお手伝いをいたしますので、海外留学に興味のある学会員は遠慮なく国際委員会メンバーにお声掛けください。今後とも国際委員会メンバー一同、日本肩関節学会員の国際化に向けて鋭意努力していきますので皆様宜しくよろしくお願い申し上げます。

高岸直人賞決定委員会

委員長 伊崎輝昌

2017年10月5日開催の委員会において、第44回日本肩関節学会学術集会以採択され選考基準を満たした演題の代議員査読評価の集計結果を検討し、高岸直人賞候補演題を決定しました。今後、対象者に論文提出を求め、委員会審議を経て第31回高岸直人賞（基礎論文、臨床論文各1編）を決定します。受賞者は、第45回日本肩関節学会学術集会以表彰されます。また、第44回日本肩関節学会学術集会以採択された演題の代議員査読評価の集計を検討し、BestAbstract16の選考を行いました。対象抄録は、Journal of Shoulder and Elbow Surgeryに掲載される予定です。



社会保険等委員会

委員長 橋口 宏

平成 30 年度診療報酬改正に向けて手術保険点数の改正要望に取り組んでおりました。肩石灰性腱炎に対しては、術式名を「関節周囲沈着石灰摘出術・肩関節」および「関節周囲沈着石灰摘出術・肩関節（鏡視下）」、手術料を 419,180 円および 617,529 円として 2018 年版外保連試案に収載されました。また、上腕骨近位部骨折に対して行う外固定の保険点数が収載されていなかったため、新規処置項目として「上腕骨近位部骨折固定術」の新設を要望し、手技料 14,269 円として外保連試案に収載されました。人件費に加えて、償還不可材料費も算定しているため高額となっており、保険収載された場合には減額が予想されますが、厚労省・中医協は診療報酬改正において社会経済的影響を当然考慮しながらも、技術的必要度に関しては外保連試案を参考とするため、外保連試案に十分な手術料をもって収載されることは非常に重要となります。また、2017 年 8 月の厚労省ヒアリングでは実態調査に基づいた必要性・妥当性について説明・要望も行いました。今後も本委員会では肩関節関連の検査、処置、手術の保険点数改正要望に取り組んでまいります。

保険収載・改正を要望する上で国内年間手術件数などの実態調査は不可欠なものとなっております。本学会の手術アンケートは綿密な集計作業・解析を行う有用な実態調査手法です。今回、2017 年（平成 29 年）1 年間の手術アンケートが行われます。従来の「肩関節手術領域の全手術」・「合併症」・「複数手術」の件数に加えて、「リバーズ型人工肩関節の原疾患と手術時間」の項目が新たに加わりました。不要項目の削除も行い、より簡便に調査票記入が行えるようアンケート作成を行いました。2018 年（平成 30 年）2 月末日に調査票の送付・回収を行い、集計・解析した結果を 2019 年（平成 31 年）雑誌「肩関節」への掲載を予定しております。

趣旨をご理解の上、アンケート調査へのご協力を何卒お願い致します。

教育研修委員会

委員長 後藤英之

今年度の教育研修委員会の活動および来年度の予定について報告致します。

第 9 回教育研修会を第 44 回日本肩関節学会開催期間中の 2017 年 10 月 7 日と 8 日に以下の通り開催致しました。

[教育研修講演 1]

座 長：北新病院 上肢人工関節・内視鏡センター長 末永直樹先生

演題 1：Overuse によるスポーツ障害の診断と治療 review

演 者：新須磨病院 整形外科 国分 毅先生

演題 2：肩関節周囲炎（凍結肩、石灰沈着性腱板炎）の診断と治療 review

演 者：高崎健康福祉大学 理学療法学科 小林 勉先生

[教育研修講演 2]

座 長：北新病院 上肢人工関節・内視鏡センター長 末永直樹先生

演題 1：肩関節周囲の骨軟部腫瘍 review

演 者：名古屋市立大学大学院医学研究科 整形外科 後藤英之先生

演題 2：肩関節の変性、炎症性疾患（OA, RA）の診断と治療 review

演 者：KKR 北陸病院整形外科 小林尚史先生

早朝の開催にも関わらず多くの参加を頂き、ありがとうございました。これからも皆様に有用な情報提供



の場となるよう開催したいと思います。来年度からは、2年間で合計8コマの講義の内容を企画致します。実施時期は来年の日本肩関節学会学術集会の会期中を予定しています。引き続き、会員の皆様の参加をお待ち致します。また、一昨年まで2回にわたって開催したキャダバーワークショップですが、そのあり方を再考するため、今年度は会員の皆様にEメールでのアンケートを実施しました。学術集会開催前の多忙な時期にも関わらず皆様からは多くのご意見がありました。ご協力頂き誠にありがとうございました。その結果、キャダバーワークショップの開催方法や受講費、内容について肯定的なご意見や建設的なご意見を頂きました。多くの先生から、解剖学、関節鏡手術、筋腱移行術などの切開手術、人工関節手術についての実習の希望が寄せられました。これを受けて、来年度以降、再度キャダバーワークショップの開催にむけて推進することとなりました。将来的に継続性のある形で、ワークショップを開催するためのあり方、予算、時期、内容について、現在、委員会で検討しております。詳細が決まり次第、皆様にご報告、ご連絡致します。

教育研修委員会としては、研修会やワークショップを通じて会員の皆様の日々の診療のお役に立てるよう活動して参りますので、今後ともご指導、ご意見を頂きますようお願い致します。

学術委員会

委員長 森澤 豊

学術委員会は、柏木健児、後藤昌史、小林勉、高瀬勝己、林田賢治、浜田純一郎、森原徹、山本宣幸の先生方から構成されています。担当理事は畑幸彦先生、委員長は森澤豊です。活動内容は、凍結肩の会員へのアンケート調査結果について、浜田純一郎委員が中心となり作成した論文 Is Contracture of the Shoulder Joint Classified as Stiff Shoulder or Frozen Shoulder? -Survey of Frozen Shoulder Questionnaire Responses from the Japan Shoulder Society- の英文雑誌への投稿を進めています。

肩鎖関節脱臼の調査につきまして高瀬勝己委員が主となり、肩鎖関節脱臼の検査方法、分類、治療方法についてのアンケート調査票が完成し、これを実施すべく準備しています。臨床の現場で活動している先生方を対象とし、診療の実際について調査するよう考えています。

初回脱臼に対する肩関節外旋位固定の前向き調査については、山本宣幸委員を中心にプロトコールを作成しており、調査を開始する方向です。

会員の皆様には、引き続き問い合わせや御協力を依頼することが多くなろうかと思いますが、何卒宜しくお願い申し上げます。

広報委員会

委員長 北村歳男

広報委員会はニュースレターを作成することが主な活動であり、その目的は日本肩関節学会の最新の活動や情報を会員および一般の方々にお知らせすることにあります。ニュースレターは日本肩関節学会のホームページ内の右列に「日本肩関節学会 Newsletter」として掲載しており、発行の直前に全会員の皆様にメールで連絡するようにしています。年に2回発行されるニュースレターの内容には雑誌肩関節の投稿規定の変更などの重要な情報やトラベリングフェローの情報などの新しい情報が入っています。是非目を通していただければ幸いです。前号の8号より字数を減らして原稿作成を行うようにしています。この理由は、作成にあたっては多くの先生に多忙な中で原稿を作成していただいていますのでその執筆側の負担を軽減し、さらに読み手にとっても見やすくそして読みやすくするための対処工夫です。これまでにすでに9回のニュースレターが発刊されました。少しずつスムーズに完成ができるようになってきました。今後の方針として、どの程度利用頻度があるか調査し、利用頻度に応じて対策・工夫が必要と考えています。委員会の構成では、担当



理事は望月由で、委員は新井隆三、石田康行、大前博路、菊川憲志、北村歳男(委員長)、国分毅、小林勉、中川泰彰、夏恒治(五十音順、敬称略)で活発な意見を出しながら委員会活動をしています。皆様からも載せた方がよい内容・記事があれば、学会事務局に連絡いただければ幸いです。何卒よろしく願いいたします。

財務委員会

委員長 林田賢治

2017年度の財務委員会の活動報告をさせていただきます。

最初に、2017年度予算作成にあたり、各委員会のご協力ありがとうございました。皆様のおかげで無事予算を作成することができました。書面を借りて御礼申し上げます。

2016年度決算報告では、新入会員の増加、過年度会費徴収が順調で収入増になりました。支出では、電子ジャーナル投稿システム使用料の減額、理事会・社員総会・各委員会開催費および印刷費および事務消耗品コストの減額により、予算案より大幅に削減できました。その結果、次年度繰越金が前年度と比較して約260万円増となり、黒字収支で終わることができました。従来赤字決算から生じていた年会費の引き上げ問題は一旦保留できる状態になりそうです。

来年度の取り組みとして、収入の面では引き続き過年度会費の徴収を効率よく行うこと、賛助会員の新入会や口数の増加に取り組むことを挙げています。支出の面では各委員会開催する際に、コスト意識を持っていただき、できるだけWeb会議を利用していただくよう広報して行きたいと思っております。

現在の年会費が適切かどうかは今後も継続して問題として挙がってくると思いますが、JSES年間購読料コストを考えると現在の年会費はかなり安価なものと考えられます。会員の先生方の中で、JSES利用をよくされている先生方は割安感を感じておられると思いますが、利用されていない人(できていない人)にとっては割高感があると思います。財務委員会では、広報委員会と協力し、会員のJSES利用率を調査するとともに、利用したいにもかかわらず接続等の問題で利用できていない人に対して、サポートするような対応を検討しています。是非多くの会員にJSESを利用してもらい、年会費の特典を十分に活用していただきたいと思っております。その後必要があれば年会費値上げの議論をしてはどうかと考えているところです。

今後も、会員の先生方には色々ご迷惑をおかけすると思っておりますが、現状をご理解いただき、ご協力のほどよろしくお願い申し上げます。

倫理・利益相反委員会

委員長 橋口 宏

ご存知の先生方も多いと思われそうですが、平成29年3月に日本医学会の「COI管理ガイドライン」が改定されました。また、日本整形外科学会でもCOIに関する指針の改正が行われ、平成29年9月21日会告として通知されました。

日本肩関節学会では「医学研究の利益相反(COI)における指針」を策定し、平成28年3月1日より学会ホームページ上で公開し、会員の先生方への周知を行ってまいりました。日本整形外科学会の指針改正を受け、本委員会でも指針の改正に取り組んでおります。学会役員COI自己申告、雑誌「肩関節」投稿の際の申告書、学会発表時におけるCOI開示の規定が全て異なっていたため、これらを全て統一していく予定です。

また、学会ホームページ英語版の充実化に合わせ、本委員会ではCOI指針の英文翻訳にも取り組んでおります。英語版が掲載された際には会員の先生方にもご覧いただきたく存じます。本学会では臨床研究の積極的推進と社会的責任を果たすための研究・開発の公正さを確保するという観点で、今後も適宜COI指針の改正を行っていく予定です。会員の先生方も産学連携の臨床研究を開始される際にはCOIを念頭に置いた取り組みを行うようお願い申し上げます。

定款等運用委員会

委員長 中川泰彰

2017年からの定款等運用委員会は、担当理事池上博泰先生、委員長私、委員が伊崎輝昌、西中直也、林田賢治、松村昇、森澤豊の各先生方で構成されています。2017年度は、2月、5月、9月に委員会が開催されました。5月までの内容は、前回のニュースレターで報告させていただきましたので、今回は、9月の委員会の内容を報告いたします。まず、「代議員選出規則」の第3条の文言を一部修正いたしました。以前に、定款が一部変更になった時に、こちらの字句の修正が抜けていたためのものです。

次に、監事の年齢制限撤廃の件とそれに伴う「役員選出規則」や「理事選出規則」についてです。昨年10月までは、理事のみでは無く、監事も満63歳未満の年齢の正会員に限るとの年齢制限を設ける解釈をしていましたが、今年5月の理事会で、理事の年齢制限は残すが、監事の年齢制限は撤廃すると決定されました。これが今年の10月の社員総会で決定されたとき、役員選出規則の変更が必要となり、「役員選出規則」の「役員」の文言の大半が「理事」に変更になりました。また、正会員には年齢制限がなく、監事は代議員の資格を有しているときは、社員総会で議決権はあるが、有していないときは議決権が無いことも確認されました。

最後に、「代議員選出規則」の内容についてです。昨年の社員総会では、第4条第2項(4)の理事会推薦候補者は、他の候補者と別に扱い審議しましたが、今年の社員総会でも、理事会推薦候補者を別に扱うことが5月の理事会で決定されました。このあたりは、ある程度色々な解釈できるように、正確に記載していなかったのですが、現理事会から、文面を読めば、解釈が1つになるような正確性を求められました。そこで、別扱いと分かるように、代議員選出規則を変更することとしましたが、明らかに別扱いと分かるように記載するか、もう少し緩やかに記載するかで議論が分かれ、最終的には、議決しました【4対2で今回の文面に決定】がその結果、以下のように修正することになりました。

第6条第3項 第2項の期間中に、正会員数の3分の1以上の異議の申し出が無かった候補者について社員総会で信任投票を行い、3分の2以上の信任が得られたものを代議員として選任する。また、第4条第2項の推薦基準(4)の候補者は他の候補者と別に扱う。なお、第4条第2項の推薦基準(1)から(3)の候補者については、前述の信任投票の結果が募集人数を超える場合には、再度投票を行い、獲得投票数の多かったものから順次当選するものとする。ただし、これらは、10月の社員総会で文面が変更になったと聞いています。

今後も、定款を含め、色々な規則に問題点が生じてくることが予想されます。疑問点や、問題点に気づかれた方は定款等運用委員会までご連絡頂けると幸いです。よろしく願いいたします。

リバーズ型人工肩関節運用委員会

委員長 菅谷啓之

リバーズ型人工肩関節運用委員会は、2016年秋以降、井樋栄二先生を担当理事とし、委員長菅谷啓之、委員として中川泰彰先生、橋口宏先生、水野直子先生、山門浩太郎先生、米田稔先生の7名がメンバー、また高岸憲二先生にはアドバイザーをお願いして活動してまいりましたが、2017年10月の第7回委員会にて、任期満了の米田稔先生に変わり、小林尚史先生に新委員に就任して頂きました。また、ガイドライン作成委員会の当初から深く当委員会に関わってこられた高岸憲二先生には、引き続きアドバイザーとして更に1年委員会をサポートして頂くことになりました。さて、2017年2月16日の日本整形外科学会理事会で、より実用的になったリバーズ型人工肩関節ガイドライン改訂版が承認され発効されました。日整会ホームページより確認できますので、皆様再度ご確認の上、活用して頂くようお願い申し上げます。また、懸案の



JAR (Japan Arthroplasty Registry) 登録率向上に関して委員一同鋭意活動してまいりましたが、現在リバース型人工肩関節の登録率は60～70%とみられており、登録率100%を目標としておりますので未だ不十分であります。学会員の先生方におかれましては是非とも登録のほどよろしくご願ひ申し上げます。登録方法に関しては、下記をご参照下さい。また、手術適応などで悩ましい症例などございましたら、事務局あるいは委員会メンバーにお問い合わせください。

JAR (Japan Arthroplasty Registry) 人工肩関節登録方法

1. 日本人工関節学会のホームページにアクセス
2. JAR 登録フォームをダウンロード
3. JAR 登録フォーム記入
4. 日本人工関節学会事務局に Fax または郵送

注：手術をされた病院が日本人工関節学会 JAR に登録されていない場合は、日本人工関節学会のホームページからまず JAR 施設登録を行い、施設 ID を取得して下さい。

選挙管理委員会

委員長 伊崎輝昌

2017年10月5日の社員総会において、学術集会会長選挙および代議員選挙を行い、下記の通り決しました。

【第47回日本肩関節学会学術集会会長】

正会員 末永 直樹 (整形外科北新病院)

【代議員】

代議員選出規則第4条2 推薦基準 (1)～(3) 該当者

乾 浩明 信原病院

夏 恒治 市立三次中央病院

西中直也 昭和大学藤が丘病院

藤井康成 鹿屋体育大学

松村 昇 慶應義塾大学

代議員選出規則第4条2 推薦基準 (4) 該当者

田中 栄 東京大学

肩の運動機能研究会のあり方ワーキンググループ

委員長 浜田純一郎

[肩の運動機能研究会の歩みと問題点、そして解決策]

2004年の第1回肩の運動機能研究会(以下研究会)から昨年で14回目の肩関節学会との同時開催となりました。この間、研究会に事務局はなくかつ会員登録もなされておらず、社会的組織として存在していません。肩関節学会会長が研究会の会長を指名し研究会の準備、主催を行い、予算・決算も肩関節学会と研究会とを合わせ収支報告書を作成してきました。研究会の参加者数や発表演題数は年々増加し、参加者のみならず研究会を開催する会長からも研究会のあり方に問題があると指摘されています。

主催者側の問題点として、(1)研究会を準備するための情報がない(参加者の名前・所属、研究会準備情報など)、(2)どのように発表を整理、分類すればよいか分からない、(3)座長を誰にすべきか分からない、(4)名簿がなく事前に抄録を送れないなどがあります。また参加者側から(1)社会的組織として認知されていない、(2)抄録集や機関紙の配布がない、(3)発表が業績として残らない、(4)研究会の情報を得づらい等を指摘されています。このような問題を解決するため本WGが発足し、研究会のあり方を2年間議論してまいりました。

研究会の予算・決算は肩関節学会に含まれるため独立採算制の組織にすることは望めません。そこでWGでは研究会を開催する会長を援助する、会員への機関紙配布、情報提供を目的とする組織づくりの必要性を全会一致で採択し、2017年10月5日の社員総会に報告の後、組織作りの許可を頂きました。

2018年大阪で開催される第15回肩の運動機能研究会にて会員募集を開始するための準備をしております。どこまでも肩関節学会と共に歩む研究会を目指す所存ですので、ご協力をお願いするとともにご意見を頂ければWGとしても幸いです。よろしくお願いたします。

▶ トラベリングフェロー帰朝報告

JSS/ASES トラベリングフェロー

山門浩太郎 福井総合病院

2016 JSS/ASES トラベリングフェローとして、慶応大学の木村聡先生と共にアメリカ大統領選の直前の1ヶ月間(2016年9月17日～10月16日)かけて7施設の見学とASESのannual meetingに参加してまいりました(表)。この場をお借りし、国際委員長のお立場を超えてご助言ご助力をいただきました菅谷啓之先生をはじめ、全ての皆様に深謝申し上げます。

さて、多民族国家たるアメリカには2つの理念があるとのこと。一つは、「自助努力」の精神であり、「自立」を重視する精神です。一方で、「弱者救済」「個々人のイニシアチブによって行われる相互扶助精神」といった対峙する理念が社会の根幹となって、アメリカ的な民主主義を成立させているとされます。

ASESのトラベリングフェローでは、ASESサイドのマネージメントは基本的に「自助・自立」。簡潔な表現では、「ほったらかし、放置、丸投げ」で、まず求められたことは「訪問する施設のリストを送れ」でありました。とりあえず、過去のフェローの訪問先と海外の訪問者が多く見学する施設のリストをもらい、木村先生とそれぞれ10点満点で点数をつけ点数の順番に希望リストを送りました。1ヶ月ほどで「訪問OK」となった施設が決まりましたが、次なる問題は移動と宿泊です。全米7箇所ともなるとホテルの予約も移動の予約もなかなか大変で、これは旧知の旅行代理店に頼んだのですが、担当者様曰く「パズルを解いた感じ」とのこと。かなりの達成感があったようです。また、各施設には施設ごとに見学申請と証明書等の送付が必要で、微妙に必要な書類が異なるため、なかなか準備に手間がかかった印象です。

そんなこんなで、2016/9/17にサンフランシスコからツアーがスタートしたのですが、ここからは「弱者救済」でした。RSAのTom Norris techniqueで高名なDr.Norrisみずからホテルにお迎えに来てくださったり、ボルチモアでは予約したホテルが遠かったため、Dr.McFarland (“Examination of the shoulder”の教科書で有名です)がポケットマネーでホテルをとってくれたり、と大変な扶助をいただきました。また、前回の韓国トラベリングフェローでも各地の料理で歓待を受けましたが、アメリカでも同様に、フロリダのワニ、ボルチモアのカニ(図1)、サンフランシスコの球場のホットドック?といった特色ある料理のもてなしを体験いたしました。



図1
ボルチモアのカニ。スパイスがまぶしてあり、ビールとベストマッチ。Dr.McFarlandみずから、食べ方の講義をいただきました。

さて、実際の見学の印象ですが、臨床的には彼我の差は少ないと感じました。特に関節鏡鏡視下手術では、特別な手技や神業のテクニックといったものはなく、日本のレベルを再確認いたしました。しかしながら、いわば整形外科のmajor leagueでしのぎを削る病院ばかりであり、全てにおいて高いレベルで淡々と手術がおこなわれておりました。また、アメリカ人というとフランクでアバウトなイメージがありますが、フェローや学生に対する接し方は厳しく、特にHSS(ニューヨーク)のDr.Cordasco(図2)は鬼軍曹的な雰囲気をもっており、一度、フェロー?が手術前の患者さんのポジショニング中に“shit”と言ったところ、2-3 m離れて我々と話していたにも関わらず、「いま何かいったか?私は良い耳をもっている。気をつけるように。」と、厳格に注意されたことがとても印象に残っております。



図2
HSS(ニューヨーク)にて。左から、Dr.Cordasco、大木先生、山門、Dr.Warren、Dr.Gulotta。

ところで、ASESの年次学会(annual meeting)は、完全closedの学会です。会員しか参加できません。また、会員資格を取ることは難しく、2人以上の推薦かつ会員の投票で入会の可否がまぎります。今回、トラベリングフェローということで、corresponding memberとして入会することが許されました。この榮譽にみあう仕事ができるよう今後も努力してまいります。

最後に、このような貴重な経験をお与えいただきました。全ての肩学会会員の方々に深く感謝いたします。ありがとうございました。

ロケーション	施設
サンフランシスコ(カルフォルニア)	California Pacific Medical Center
ゲインズビル(フロリダ)	University of Florida,Gainesville,FL
セントルイス(ミズーリ)	Washington University, ST.Louis
ボルチモア(メリーランド)	Johns Hopkins University
ピッツバーグ(ペンシルバニア)	University of Pittsburgh Medical Center
ボストン(ニューヨーク)	ASES 2016 annual meeting
ニューヨーク(ニューヨーク)	Hospital for Special Surgery/Columbia
ニューヨーク(ニューヨーク)	University Medical Center

JSS/ASES トラベリングフェロー

大木 聡 慶應義塾大学 整形外科

今回私は2016年9月17日～10月16日までASESトラベリングフェローシップに参加させていただきました。私は研究・臨床の両面を比較的長く見学できたフロリダ大学、ピッツバーグ大学を中心に報告させて頂きたいと思います。フロリダ大学はゲインズビルという気温が温暖な都市の真ん中に位置していました。フロリダ大学のThomas Wright先生は見学の日程を臨床・スポーツ施設・工場見学・研究施設に分けて設定してくださり、大変充実した日程でした。初日にはリバースショルダーの4件を見学しました。手術では積極的にAugmentationのついたGlenoidインプラントを使用していました。印象的だったのはどこの施設でも共通ですが、バンコマイシンパウダーをほとんど全例に使用していたことです。2日目には大学とは思えない球場とトレーニング施設を見学し、3日目はScott Banks先生のバイオメカニクス研究室を案内していただきました。ここには多くの日本人の先生が留学しており、2D-3D registrationを始めさまざまな研究のお話を聞くことができました。同日にはExactech社の見学をし、欧米人と日本人のサイズについてのDiscussionの機会をいただきました。週末にはWright先生のご厚意でアリゲーターウォッチングの機会を頂き、大変楽しい経験ができました。



フロリダ Wright先生夫妻と

Pittsburgh大学は日曜到着で月曜からの見学でしたが、日曜日空港にMark Baratz先生が来ており、その足で自分の経営する牧場に連れてってくださいました。そこからフットボールの試合を夜中まで観戦して、翌日からの見学スタートとなりました。初日は大学でSchmidt先生の行う人工肩関節の手術を見学し、翌日はBaratz先生の手肘の手術を別施設で見学させていただきました。最終日には日本から留学中の先生方にPittsburghの研究施設を案内して頂きました。

全体を通してアメリカの手術で印象に残ったのはいかに効率よく手術をやるかというシステムを徹底していることでした。前室で麻酔をし、入室後はPhysician Assistant(PA)がポジショニングを行い、フェローが展開をしてアテンディングがインプラント挿入を指導するという流れがしっかりとされており、これが数多くの手術を短時間で終わらせる事を可能にし、患者の集客につながっているということが理解できました。また、手術内容としてはどこの施設でもバンコマイシンパウダーを使用していた事、幅広くAllograftを人工関節ステム周囲に補強として用いる目的で使用していた事が印象に残りました。

最後になりましたが、このような機会を下さった菅谷先生をはじめとする国際委員会の先生方、留守中にご迷惑をおかけした慶應大学整形外科の先生方、そして現地で大変お世話になりました山門先生に深謝いたします。



ピッツバーグ Baratz先生の牧場で

JSS/SECEC トラベリングフェロー

糸魚川善昭 順天堂大学医学部附属浦安病院



左から Moon 先生、Roger Emery 先生、私：ロンドンにて

今回 2016 年 9 月 22 日からベルギーのアントワープで開催された SECEC に参加した後 10 月 22 日まで、約 4 週間かけて 8 か所の病院でヨーロッパでの研修をさせて頂きました。Chosun Univ Hospital の教授で、2017 年韓国肩肘学会の会長でもある Young L Moon 先生と 2 人でヨーロッパ各地を回りました。彼は、普段から世界各地で講演されている先生でしたので、兄貴分のように色々助けて頂き今でも感謝しております。研修先は Roger Emery 先生（イギリス、ロンドン）、Andreas Imhoff 先生（ドイツ、ミュンヘン）、Markus Wambacher 先生（オーストリア、インスブルク）、Carlos Torrens 先生（スペイン、バルセロナ）、Bernhard Jost 先生（スイス、セントガレン）、Frank Gohlke 先生（ドイツ、ブルツブルク）、Pascal Boileau 先生（フランス、ニース）、Stefano Carbone 先生（イタリア、ローマ）の順に回りました。大変ご高名な先生方の所で、手術や行っている治療のコンセプトなどを学び、お互いの研究を議論し、夜は宴会で交流を深めるという非常に有意義であったという間の 4 週間でした。

今回最も勉強したかったのはリバー型人工肩関節置換術でしたが、向こうの先生方も日本では最近認可されたのをご存知で積極的にご教授頂きました。最も印象的だったのは、70 歳以上の高齢者に対する 4 parts 上腕骨外科頸骨折に対して、私なら骨接合術をするような症例に対してリバーを行い、最初は少しやりすぎではないかと思いましたが、外来の患者さんが殆ど左右差ないぐらいの可動域になっているのに驚きました。また、それは一施設だけでなく数か所の病院で同様な治療を行い良好な成績でさらに驚きました。ポイントは、大結節、小結節をしっかり骨幹部に縫い付け、内外旋は腱板の機能、挙上はリバーの機能で臨床成績を向上させているということでした。高齢者の骨接合術は術後機能がまいちなケースも多いので有用な治療であると感じました。またさらにリバーの適応拡大と共にアナトミカル人工肩関節置換術も進歩し、リビジョンを考慮したショートステムやステムレスが主流となってきているようでした。

肩関節脱臼に関しては、日本に比べると Latarjet 法がかなりポピュラーでした。鏡視下、直視下のどちらがいいというのは賛否両論ありましたが、私としてはそれぞれの先生から学んだ丁寧かつ効率的な直視下の手法は帰国後も参考にさせて頂いております。

宴会での交流は、ヨーロッパと一言で言ってもそれぞれの国で経済状況、医療システムが全く違い、日本と同じようにそれぞれに問題点を抱えていますが、その中でみんな頑張っ自分のベストと思うものを確立しているのだという事を知りモチベーションを頂くことが出来ました。

最後にこのような機会を与えて頂いた日本肩関節学会の先生方、私を推薦してくださった恩師の井樋栄二教授、そしてヨーロッパ研修中にご迷惑をかけた順天堂大学附属浦安病院の先生方、トラベリングフェロー前に貴重なアドバイスを下さった東北大学の先生方に心から御礼申し上げます。



本場のオクトーバーフェスト（ミュンヘン）：右から二番目が Andreas Imhoff 先生

JSS/KSES トラベリングフェロー

酒井忠博 トヨタ記念病院



2017年3月19日～4月15日の4週間にわたり、JSS/KSES トラベリングフェローとしてKSES Spring Congressでの発表を含め5回の講演をしつつ、韓国の肩関節外科病院16施設を見学させて頂きました。

手術の内訳は肩関節鏡42例、肘関節鏡2例、人工関節関係8例、骨折1例、その他3例の計56例で、肩関節鏡のうち腱板修復術は30例と圧倒的に多く、脱臼は3例(open2例)のみでした。

肩関節鏡手術の特徴としては、体位はビーチチェア位と側臥位がほぼ半々で側臥位がやや多く、腱板修復術では全例関節包切離を行い、固定法はsuture bridgeとsingle rowが半々で、single rowではmodified Mason-Allen法を使用されていました。意外だったのは、スライディングノットを使用していた先生が僅か1～2名であり、有名なSMC knotですら誰も使用しておられないことでした。

韓国の病院はとにかく圧倒的なインフラで、ベッド数1,000床以上、手術室も20以上あり、とても綺麗な施設が多いことに驚かされました。外来では70～80人/半日を診察し、大学の教授は数人のフェローを使って週に10～20件の手術をこなし、網羅的にデータを収集して論文を次々に発表するシステムをしっかりと構築しています。また、殆どの医師、医学生は英語が堪能で、フェローシップ制度もしっかりしているため、アジア諸国から沢山のフェローが集まり、アジア各地に戻って成長していくという構図がはっきり見え、国際化という点では完全に遅れを取っていると感じました。ただ、効率的にみえる教授を頂点とした完全なピラミッド体制の中には本当に過酷な競争が存在しており、韓国では整形外科医、しかも肩関節外科医になれるのが、ほんの一握りの選ばれた人間だけであるという厳しい実情があり、韓国の医学生は、日本の方が自由で良い環境だと聞いているようで、日本の医療システムに興味津々でした。

今回は朴大統領の弾劾、逮捕、北朝鮮のミサイル発射と物騒な状況の中の韓国訪問となりましたが、韓国への交換留学は、その圧倒的なインフラとシステムを見学でき、英語で会話、講演をする良いトレーニングになること、毎日酒が飲めて韓国の先生達とともに仲良くなれることと良い事づくめであり、日本の先生方には積極的に参加して頂くよう心からお勧め致します。

最後に、このような機会を与えて下さった日本肩関節学会の理事、代議員の先生方、私を推薦して下さいました菅谷啓之先生、岩堀裕介先生、そして全ての日程に細やかなご配慮を頂いたKSESの関係者の方々に深謝申し上げます。

また、1ヶ月間良き相棒でいてくれた平田正純先生と、昨年に続いて今年も1ヶ月以上の不在を許してくれた名古屋大学整形外科膝肩班の先生方と家内に心から感謝の意を表します。



JSS/KSES トラベリングフェロー

平田正純 AR-Ex 尾山台整形外科 東京関節鏡センター



図.1



図.2

2017年3月19日～4月15日までの4週間 KSES / JSS トラベリングフェローとして韓国を訪問させていただきました。第1週はソウルの施設訪問と KSES 学術集会参加および講演を行い、第2週は南部の主要都市を巡り、第3、4週はソウルに戻り近隣都市の病院を訪問しました。各施設訪問の概略は早朝ホテルロビーに集合しフェロー（時にはホストの先生自ら）の迎えがあり、午前中は主に手術見学や外来見学、午後は概ね手術見学でした。歴代の先生方の報告通り、毎晩韓国焼酎の瓶を何十本も空にする大宴会でしたが、宴会までの午後の数時間にわたるアクティビティーが全く予測不可能で都市城壁巡りや時にはハイキング等盛り沢山の内容でした。

韓国の施設は巨大なインフラ、統率された診療システムを基盤にデータベースを構築し臨床データを次々と量産し、アジア各国から積極的にクリニカルフェローを招き入れていました。KSES の先生方はみなさん熱い志を持ち、2016年に国際肩肘学会を開催し成功した自信に満ちあふれていました。明治維新後や戦後の高度成長期にアジアや世界で、日本人がそのプレゼンスを示していった際にはこのようなバイタリティがあったのではないかと感じ、多くの

刺激を受けました。私がスポーツクリニック勤務、同行の酒井先生が当時大学病院勤務であり、お互い異なる立場での講演とディスカッション、違った目線での KSES の先生方との意見交換も非常に有意義でした。

現職大統領の弾劾、逮捕をリアルタイムに体験し、帰国日に北朝鮮の軍事パレードが行われ、翌日には弾道ミサイルが発射されるという物騒な状況の滞在でした。毎日がきわめて予測不可能かつ非常に刺激的で楽しい日々であり、一介の勤務医の立場では不可能な多くの貴重な経験をしました。これも今まで日韓両学会の良好な関係を築いてこられた先人の先生方の努力・功績のお陰と感じております。今回公式の休日はたった1日であり、おそらく全ての面において他のトラベリングフェローより気力・体力・肝力・胆力を必要としますが、ぜひ学会員の先生方に当プログラムに奮って応募いただきたいと思います。その際にはなんでも私にご質問ください。

今回貴重な機会をいただきました日本肩関節学会の理事、代議員の先生方、推薦いただいた国際委員長菅谷啓之先生に深謝いたします。そして滞在中にわたりきめ細やかな気配りをいただいた事務局の Samsung Medical Center Yoo 先生、KSES の先生方にも深く感謝いたします。(図1,2) 今後も両学会相互の友好と発展に微力ながら尽力いたす次第です(図3)。多くの面で助けていただき、共に生き



図.3

のびた同志酒井忠博先生には大感謝です。最後に留守を守っていただいたアレックスグループの皆さん、快く送り出してくれ日本からエールをくれた家族に感謝いたします。



▶ 事務局からのお知らせ

新しい年が始まりましたが、本年度も引き続き日本肩関節学会へのご支援をよろしくお願いいたします。

事務局では、2017年12月に2017年度年会費請求書をお送りさせていただきました。

この原稿を書いている1月5日までに会員数の約42%、約740件の年会費の納付をいただきました。

早速のご納付とご対応をいただきましてありがとうございます。

今回は年会費請求書の書面にJSESオンライン購読のaccount numberを記載させていただきました。

(ただし、2016年度年会費を納付した先生のみ)

財務委員会からのお知らせにもありましたように、購読料金は個人で契約するより安い金額で購読できると思います。まだオンライン購読をお試しになっていない先生、ご興味がある先生は是非、ログインを試みてください。ログイン方法は、学会ホームページのお知らせ欄(2017年12月12日)に掲載しておりますので、ご確認ください。なお、ログインできないなどの不具合がございましたら、お気軽に事務局までご連絡ください。

また雑誌「肩関節」オンラインジャーナルの購読者番号・PWも、2017年9月20日にお送りしたメール、または年会費請求書に同封させていただきました。J-stageの仕様変更に伴い、インターフェイスが変わりましたので、一度、ログインしてみてくださいと思います。

最後に会員の先生方へお願いがございます。

現在、郵便物の送付先不明が20件ほど、メールアドレスのエラー戻りが30件ほどあり、事務局で確認作業を続けております。

先生方のご勤務先、ご自宅の住所、メールアドレスの変更等がございましたら、事務局へお知らせいただきますよう(メール: office@shoulder-s.jp または、電話: 03-6369-9981、FAX: 03-6369-9982) お願いいたします。



一般社団法人

日本肩関節学会

Japan Shoulder Society

Newsletter

編集

広報委員会

後記

新井 隆三

新年明けましておめでとうございます。

このニュースレターがお手元に届くころには「平成 30 年」という記載にも違和感がなくなってきている頃かと思います。そして冬季オリンピックへの世間の関心がどんどん高くなってきているのではないのでしょうか。

オリンピックに限らず日本肩関節学会も国際化を掲げてから久しくなりました。2017 年学術集会会長の菅谷啓之先生がまさに多士済々といった演者を海外から招聘され、日本にしながら global opinions に触れられるようにして下さったのは、まだ記憶に新しいところです。一方で 2018 年学術集会会長の菅本一臣先生が本レターにお寄せくださったごあいさつを拝読すると、日本独自の考え方を醸成して世界に発信しようという気概に満ちておられることがうかがわれます。トラベリングフェローとして行き来された先生方がすでに実践されているような、双方向の意見交換がこれからもっと盛んになればと感じる次第です。

本レターが無事発刊できたのはご寄稿いただいた先生方はもちろんのこと、広報委員会の先生方、学会事務局の皆様のご尽力によります。この場をお借りして謹んでお礼申し上げます。



一般社団法人

日本肩関節学会

Japan Shoulder Society

編集：一般社団法人 日本肩関節学会 広報委員会

望月由（担当理事）、北村歳男（委員長）、新井隆三、石田康行、大前博路、菊川憲志、国分毅、中村泰彰、夏恒治

発行：一般社団法人 日本肩関節学会

〒108-0073 東京都港区三田 3-13-12 三田 MT ビル 8 階 株式会社アイ・エス・エス内

TEL 03-6369-9981 / FAX 03-6369-9982

E-mail office@shoulder-s.jp URL <http://www.j-shoulder-s.jp/>